

## 書 評

藤本夕衣 著

## 『古典を失った大学—近代性の危機と教養の行方』

仁 平 政 人\*

本書は、若手の教育学者・藤本夕衣氏の博士論文に基づく著作である。本書の表題は、ともすれば保守性や回顧性を感じさせるものかも知れない。が、本書は決して「大学から古典が失われた」ことへの単なる嘆きなどを語るものではない。もともと藤本氏は、京都大学の高等教育研究開発推進センターに所属して「大学改革」の状況に深く接しており、そこで得られた状況認識にこそ、本書は立脚している。ユニバーサル化とグローバル化という流れに沿って進められる今日の大学改革においては、近代的な（「フンボルト型」の）大学の理念は説得力を失わざるを得ない。だが、それに変わるような大学の理念はいまだ提示されておらず、中等教育や専門学校と異なる「大学独自の存在意義」を語ること自体が困難となっている。——この問題に対峙する上で、藤本氏は、近代的な大学理念の失墜が、単に近年の状況だけに関わるのではなく、その背後にある長期的で根本的な「知の変動」、すなわち所謂「ポスト・モダン」の状況（その徴候は、一九七〇年代以降の「古典」への関心低下に見出される）に関わっているという見方を提示する。その上で藤本氏は、ポスト・モダンの状況を深く捉えながら、対極的な立場で「大学で「古典」を読む」ことの意義をあえて強調した二人の哲学者、A・ブルームとR・ローティの議論の検討を通して、現状の困難を乗り越える手がかりを探っていく。

本書の中核は、この二人（および両者の師にあたるL・シュトラウス）の語る古典論／大学論を詳細に読み解き、その対立点と共通点を検討していく考察にあるが、それを十分紹介する紙幅はない。ただ、ごく簡単に要点に触れておけば、ブルーム＝シュトラウスにあって古典（「グレート・ブックス」）を読むことの意義は、「時代を超えた問い」の存在に触れさせることで知的好奇心を導き、ひいては「決断主義」に陥ることを回避させる点にあるとされる。他方ローティは、古典（「偉大な文芸作品」）への熱中こそが読者に「リベラル・ユートピア」への希望を与え、実践的に社会に関与する行為者にさせていくとする。藤本氏は、これらの議論が多くの差異を持ちつつも、ともに「ニヒリズムの常態化」という現状を批判し、また「近代民主主義」との関係という政治的観点において大学の社会的な意義を語るものであることを指摘する。そしてそこにこそ、近代的な大学理念とは別の形で、大学と社会の関係を語る「大学の物語」としての可能性を見出すのである。

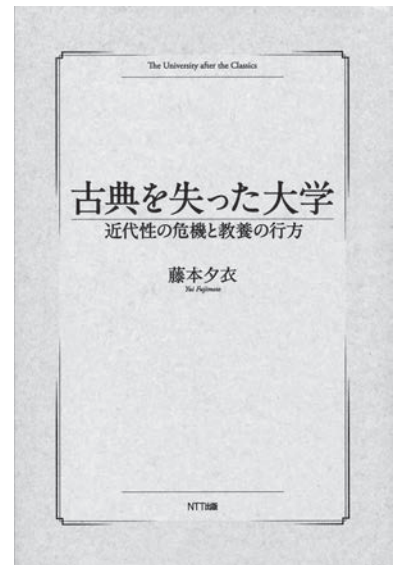
もちろんこうした議論に対しては、例えばこれらの「大学の物語」が、専門分化した現代の大学のどの範囲に有効なのかといった疑問もありえよう。また、ブルームやローティの時代認識をそのまま受け止め、それを今日の状況に結びつけていく論述に対しては、様々な疑問や異論もあり得るはずだ。ただし、藤本氏も、ブルームやローティの議論が、そのまま現代日本の大学理念や、実践的なカリキュラムに結びつくとしているわけではない。藤本氏が強調するのは、ブルームやローティの「大学の物語」が、今日の大学（論）の隘路を越える道筋を示しているということだ。——「役に立つ」ことばかりが重視されることや、長期的な視点に基づいた改革が為されていないこと自体が問題なのではない…そうではなく、大学の物語が、「経済活動」としての「社会」にばかり関わる物語になってしまっている

\*弘前大学教育学部

Faculty of Education, Hirosaki University

こと、それが問題なのである。」(「おわりに」)

「社会＝経済活動の場」という等式を自明化することも、旧来の「大学の理念」に寄りかかることもなく、現状をシビアにとらえながら、大学と社会の関係、そして大学の意義を新たに語り直すこと。結論に同意するか否かはおいて、藤本氏のこうした問題意識が、今日において重要性を持つことは確かだろう。そしてそのような問題は、大学の多様な場において共有され、様々な解答が試みられるべきものと考えられるのである。



〔NTT出版 本体3,990円〕